

平成二十四年度 第二十三回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

## 「教団とは何か―新しい佛教史からその明日を考える」を聴講して

三 原 正 資

本阿弥光悦が書写した法華題目抄を拝したことがある。やわらかい文字の中から、かつて洛北鷹ヶ峰にひびいた唱題の音が聞えるようだった。

### 南無妙法蓮華経

問て云く、法華経の意をもしらず、義理をもあちははずして、只南無妙法蓮華経と計り五字七字に限て一日に一遍、一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱へても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。答て云く、しかるべき也。(定三九一頁)

日蓮聖人が宗義の根本を分かりやすく示されたこのご遺文に私が初めてふれたのは、身延山高校一年生のときだった。定本遺文を手にとって朗読される長谷川義浩先生の姿は、今もなお鮮やかだ。そして

梅子のすき<sup>な</sup>声をきけば口につ(唾)たまりうるをう。世間の不思議是の如し、況や法華経の不思議をや。小乗の四

諦の名計りをさやづる鸚鵡なお天に生ず。三帰計りを持人大魚の難をまぬかる。：

と続く一節は、不思議に私の脳裏に残った。それから四〇年、私はふたたび法華題目抄のこのことばにめぐりあった。一〇年ほど前のこと、私は仏教美術に興味をもち、ガンダーラやハッダの仏像の残欠を手許でいつくしみ、古写経の断片をもとめた。その一つが「大聖武」と呼ばれる賢愚経の一節だった。

さっそく書棚から『国訳一切経 本縁部七』（大東出版社）を手にとり、開いた。解説によると、この小乗部の経典は、西紀四四五年に漢訳され、他に西蔵訳、蒙古訳がある。

此の賢愚経、十三卷、六十九品は十二分教中譬喩經典である。（略）支那に於て編纂なれし法苑辞林、経律異相等に影響を与へ日本に於てはその説話文学の一大巨塔なる今昔物語に直接或は間接にその影響を及ぼすこと大なるものがある。

賢愚経をひらいて品名をたどっていると、二鸚鵡聞四諦品があった。もしやと思って読むと、法華題目抄の「小乗の四諦の名計りをさやづる鸚鵡なお天に生ず」と同じ物語のようだった（『本化聖典大辞林』は両者の関係を指摘している）。さらに賢愚経を読み進むと、富那奇縁品に「三帰計りを持人大魚の難をまぬかる」と同様の物語もあった。私は賢愚経に旧知に会うような親しみをおぼえた。さらに読み進むと、七喩に代表される法華経の物語と共通性のある物語にも出会った。

出家功德戸利苾提品に描かれる大施菩薩の冒険譚は、ここで詳しく述べる余裕はないが、法華経の長者窮子の説話、化城喩品の説話、提婆達多品の龍女や安樂行品の髻中明珠の説話等を想起させるものだった。ほかにも優婆塞兄所殺

品には如来寿量品の良医の譬えの素材のような説話が見受けられた。

小乗経と大乘経は近い関係にあるのではないか、小乗経を奉ずる部派教団から法華経は生まれたのではないか、と私は思った。

ところが、私の大乘仏教成立に関する知識は、例えば、学生時代に読んだ『法華経の探求』（紀野一義著 平楽寺書店 一九六二年）に述べられた次のようなものだった。

大乘仏教の教団が、仏塔を中心に集まっていた在家信者の集まりから発達して来たという事実、今日では、ほぼ学会の定説として認められている。（略）

びく（比丘・bhikkhu）の音訳・専門の修行僧）僧団が高遠な教義を伝統的に守りつづけ、難解な註訳書を作って自己陶醉している間に、仏塔を守っていた在家信者たちは、仏塔を釈尊自身とみなして礼拝し、宗教的感動に浸り、同志的結合を深めて行ったのである。かれらは、後に記すように、自分たちのことをボーディサットヴァ（bodhisattva・菩薩・求道者の意）と称し、彼らの中のある人々、恐らくは出家のぼさつが、常時、仏塔の中に住んで、ぼさつ団の中心となったものと思われるのである。

さて、私がこの教団論や經典観を見直す契機を与えられたのは、平成二二年一〇月末から一一月の初めに訪問したアメリカはカリフォルニア州ヘイワードにある開教布教センター（平井智親所長・当時）で開教師と話し、またサンフランシスコにあるグリーンガルチ禅農場に行ったときだった。アメリカには日本仏教とはちがう仏教があった。

帰国してから、欧米の仏教研究を牽引している学者のひとり、グレゴリー・ショペン（UCCLAアジア言語文化部教授）の『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』（春秋社 二〇〇〇年）を読んだ。パークレーにあるカリフォル

ニア大学を散策したことも、おもしろい偶然であった。シヨペンの描く大乘仏教興起時代のインドの僧院生活の実態は、賢愚経に描かれた修行僧のありさまにも通じて興味深かった。それにしても、パークレー校の構内は林が広がり、樹々の間を抜ける道を歩くことは東洋の思想を思惟するのにふさわしかった。

さて、このシヨペンの見解に刺激され、ちょうどそのころ出版されていた『シリーズ大乘仏教』（春秋社）を読んで、私は初めて今日の大乗仏教成立論にふれて驚いた。これまでいっていた小乗仏教と大乘仏教のイメージは反転し、それは賢愚経を読んだ時いただいた印象を再確認するものだった。

下田正弘氏（東京大学教授）は大乘仏教成立論の変化にふれて次のように述べている。

在家仏塔起源説は、僧院仏教の専門化した厳格な出家主義を、儀礼をこととする在家者中心の大乗仏教運動が揺るがしはじめ、やがて在家者の救済を目的とするあらたな形態の仏教を生み出したところに初期大乘仏教が成立するとみる。この新仏教運動は、時代を経るとともにふたたび出家主義化し、仏塔儀礼に対して否定的となり、ついに僧院仏教の専門化した世界に舞い戻って一時代を終えるというプロットである。

ところがいましがたに見たように、業の理論と廻向の思想にもとづき仏塔中心の儀礼をとおして大衆向けの仏教活動をしていたのはじつは伝統仏教のほうであって、初期大乘仏教はこの伝統仏教の世俗性を批判し、厳格な出家主義を称揚する立場に立っている。（『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教の誕生』「第2章 経典を創出―大乘の出現

下田正弘」二〇一一年）

法華経勸持品に説かれる「悪世の中の比丘」と、「経典を作つ」たと批判される「諸の比丘等」との両者の抗争は、この見解を物語るものではなからうか。

法華経は

妙法華経の一偈一句を聞いて、乃至一念も随喜せん者には我皆記を与へ授く。（法師品）

如来の滅後に、若し受持し（略）経巻を供養することあらん者は、復塔寺を起て及び僧坊を造り衆僧を供養することを須ひず。（分別功德品）

等と尖锐な主張をくり返す。賢愚経にも次のような一節がある。

假使人有<sup>たとひ</sup>七宝の塔を起し高さ三十三天に至るも得る所の功德出家に如かず。何を以ての故に、七宝の塔を貪悪の愚人能く壊破するの故に、出家の法は毀破有ること無し。（出家功德戸利苾提品）

ラディカルに教えの一句一偈を実践する人びとや、ひとりの僧として生きること誇りをもつ修行者の中から、ブツダを慕い、ボサツの自覚をいづく者が生まれたのであろうか。法華経法師品のことばをかりると、彼らは如来の滅後に生きながら「如来の現在」を歩むことを自覚したものだったのではないか。そこに經典制作の必然性も生じたのではなからうか。

インドやわが国における教団の起源と実態を知るとは、如来の滅後にいる私たちが「現在」をいかに生きていくかとの問題とかかわる。私たちが「如来の現在」を生きたいものである。

終わりに、私の心にのこる法華経分別功德品の、「声聞縁覚と作り<sup>な</sup>」（五百弟子受記品）僧院で修行する法華経のボサツの姿を描いたと思われる一節を掲げておく。

塔廟を恭敬し 諸の比丘に謙下して 自高の心を遠離し 常に智慧を思惟し 問難することあらんに瞋らず 随順して為に解説せん

宗祖は、かれらボサツと心をかよわされていたのではなからうか。この一節に若き聖人のお姿をかいま見るようである。